レポート

‘エコヴィレッジ・さいかい元気村’ 誕生

「さいかい元気村」開村

今年（2009年）の８月、長崎県にひとつの村が誕生した。村といっても行政単位の村ではない。西海市に、自然との調和を大切にした、持続可能な「農的暮らし」の体験拠点「エコヴィレッジ・さいかい元気村」（以下、「元気村」）が開村したのである。

「元気村」を主宰するのは、地域の農業団体やNPO、有志、行政など８団体からなる任意団体「さいかい元気村協議会」（増山文明 会長）で、事務局を道の駅みかんドーム（NPO法人西海市観光協会）に置いて活動している。

これまでの経緯

（きっかけ）

西海市は、県都長崎市と県北の中心都市佐世保市の間にある県内有数の農業地帯である。これまで西海市では、都市住民が農山漁村地域を訪れて農業体験や農家民泊などを楽しむグリーンツーリズムに先駆的に取り組み、最近ではブルーツーリズム、エコツーリズムなどの考え方も含めたスローツーリズムを積極的に展開してきた。しかし、ビートルキャンプ（カブトムシ採集）やみかん狩りなどの体験メニュー・イベントや民泊など活発な取り組みがなされているものの、どうしても一過性の体験、通過型の消費になりがちであった。また、受け入れ側もボランティア的な色彩が強く、経済的な効果も限定されていた。

そこで、会長以下スタッフが、今よりもっと持続可能な仕組みを築くことができないか、都市からの来訪者と一緒になって何かできないかと考えていたところに、テレビの全国ネットで放映されている「DASH村」にヒントを得てこの「元気村」の計画を思いついたのである。

（「むらづくり」の事業計画）

長崎県の指導のもとに、07年７月に「西海の元気の素を見つけよう会」が発足。その後５回のワークショップを経て08年３月に「さいかい元気づくりプラン」を作成した。同年６月には協議会の名称を「さいかい元気村協議会」として設立。同年７月には国（農林水産省）の「農山漁村（ふるさと）地域力発掘支援モデル事業」に認定され、補助を受けることとなった。

「元気村」の「むらづくり」は､「農的暮らしに触れる旅の楽しみ」と「持続可能な農的暮らし」の２つを楽しむことができるフィールドづくりにあり、そのフィールドづくりを体験することができるテーマ・ヴィレッジが「元気村」である。つまり、体験フィールドづくりそのものを体験する、言い換えれば「むらづくり」に参加するという点がこれまでの類似事業とは一味違うところといえるだろう。

さらに同事業では、「元気村」という拠点を通じて、「地域資源を活用した特産品や体験プログラムの開発、それらの商品化を中心に取り組む」（事業計画より一部抜粋）こととしており、「交流人口増加を目指し、将来はさいかい元気村の産品・地域の物産流通の場とする」（同）計画である。具体的な数値目標（2008年度～2012年度の５年間）も設定しており、たとえば、「５年後のさいかい元気村及び、周辺地域の年間入込客数の5,000名増。５年後の特産品開発商品数５品以上、売上1,500万円」（同）などとなっている。

（開村の準備）

増山会長が自分のミカン畑約2.2ヘクタールを提供し、農家などからなる「のら体験工房さいかい」（増山文明会長）や地域のグループ、西海市などが中心となってその土地の伐採作業などを進めてきた。現在そのうち50アールに様々な作物を栽培している。

また、開村までに、農林業を核とした地域活性化の事例調査（山梨県八ヶ岳倶楽部、長野県安曇野舎櫨夢シュッテなど）や専門家の指導研修会の開催、シフォンケーキのテスト販売（福岡のマリノアシティ、長崎県庁生協）などを行い「元気村」運営の参考とした。

「元気村」の楽しみ方

（「むらびと」になる）

「むらづくり」に参加するには「むらびと」になる必要がある。「むらびと」になるには年会費の負担が生じるが、諸々の体験料は「むらびと以外」よりも安くなる。初年度は60組（１人でも可）を募集中で、11月15日現在55組（121人）の「むらびと」が誕生した。

「むらびと」には、小さな子供のいる家族もいれば、高齢者の夫婦、ひとりで参加している人

もいる。そのように多様な人々から構成される「むらびと」は、まだ開村間もないため顔を合わせる機会は少ないが、少しずつ親睦が深まってきている。

また、そのほとんどが長崎市や佐世保市など西海市以外に住む人々で、なかには福岡県や宮崎県在住者もいる。「むらびと」の中には、「元気村」を安近短な週末のレジャーとしてとらえて楽しんでいる人もおり、そのような人々がドライブを兼ねて周辺の直売所や道の駅、飲食店などに立ち寄ることで、地域経済に効果を及ぼしている。

村　長

（「むらづくり」に取り組む）

「むらびと」は月に１回以上（原則、第三日曜日）、「元気村」に集まりワークショップ～例えばツリーハウスを作ったり、自然農法で野菜を育てたり～を楽しむこととしており、これまでに３回開催され、毎回20組から30組の「むらびと」が集まっている。なかでも10月には「のら体験工房さいかい」の収穫祭と一緒に開催され、ジャンボピーナツなど「村」初めての収穫を体験。見学者も含めて大勢で賑わった。畑には、そば、唐辛子、じゃがいも、だいこん、小麦なども栽培しており、「むらびと」は次の収穫を楽しみにしている。

ジャンボピーナツ収穫の様子

また、そのほかにも、山遊びや海遊び、里遊びのプログラムも実施しながら環境や自然と調和したエコヴィレッジづくりを体験することができる。

（体験プログラムを楽しむ）～「むらびと」も「むらびと以外」も参加可能～

エコハウス建設の様子

「むらびと」を対象とした取り組みのほかに、「むらびと」以外でも参加することができる体験プログラム（有料）もある。これまでに実施（計画含む）された体験プログラムには、エコハウス、ツリーハウス、コンポストトイレ、アースオーブン、自然農園などがあり、その他のプログラムも随時実施する計画となっている。

「元気村」の今とこれから

（高い注目度）

「元気村」の活動の様子は、村発行の「さいかい元気村だより」やホームページ上のブログで村外にも情報発信しているが、人々の「村」に対する注目度はスタッフが考えていた以上に高いようだ。農村と都市の交流や農業による地域活性化に関心を持つ人々の視察が相次いでいるほか、地元・県外のマスコミの取材も多い。なかには定期的にむらづくりの様子を紹介しているところもあり、テレビや雑誌に紹介されたのを見て「むらびと」になった人も少なくない。

（自立に向けて）

「元気村」を持続可能なものとするためには、人材と資金の面が肝心となる。まず、人材面では、会長をはじめとする地元スタッフは皆、別に農業などの本業を持っており、これまではボランティア的な色彩が強かった。そこで、新たに専門スタッフ２名を採用した。採用に当たっては、「ふるさと雇用再生特別基金事業」を活用し、西海市から「村」が委託を受けて雇用する形態となっている。

次に資金面では、国からの補助だけに頼ることがないように自主財源を確かなものにしておく必要がある。そのためには、「元気村」内の収穫物の物販と体験料収入だけでは広がりに限りがあるため、周辺の農家とも連携して団体の体験客を受け入れることなども計画している。

その点、協議会の構成員であるNPO法人西海市観光協会がこのたび第３種旅行業の免許を所得し12月から旅行代理店として営業を開始することは、むらづくりに大いにプラスとなるに違いない。同免許の取得により、西海市と隣接市町村の区域内を行程とするパッケージ旅行の企画・募集が可能となり、その中に「元気村」を取り込むことでその商品の魅力が高まるとともに「元気村」の認知度も向上するという相乗効果が見込まれる。

グリーンツーリズムという分野で県内における先駆的役割を果たしてきた西海市地域が、今また、新しいモデルで農村活性化を図ろうとしている。「元気村」をきっかけに、農業や自然体験、もの作り体験に関心も持つ団塊世代やファミリー層などの誘客が進み、農村と都市の交流が活発になることを期待したい。

（宮崎　繁樹）

※写真はすべて「さいかい元気村協議会」提供